

平成23年度 大学院工芸科学研究科博士前期課程 学位記授与式 学長告辞

今日、ここに、修士課程を無事終えられ、学位授与式に臨まれた418名の皆さんに対し、心からお祝いを述べたいと思います。また、皆さんの勉学・研究を支えてくれた、ご家族を初めとする多くの方々に対し、深く敬意を表します。

京都工芸繊維大学は、昭和63年に工芸科学研究科を設置し、これまでに、6804名の修士号取得者を生み出し、多くの知的財産を着実に蓄積してまいりました。本日は、皆さんに、第6805号から第7223号までの修士の学位を授与させていただきました。

皆さんは、学部卒業の後、専門を深めるというそれぞれの目的をもって大学院修士課程に進学されました。そして、2年間の教育課程で研鑽を詰まれ、輝かしい成果を挙げ、本日、目出度く学位授与式を迎えられました。

皆さんの中には直ぐに社会にでる人もいるでしょうし、これから博士課程でさらに研究に従事する人もいるでしょう。あるいは、祖国に帰り、祖国の発展のために働く人もいるでしょう。それぞれの将来計画の実現に向け、勇往邁進されることと信じています。その際、本学の修士課程での研鑽し、習得した成果を十分に生かし、人生の新しい段階を切り開くよう一層奮励努力されることを祈って止みません。

昨年3月11日に起こった東日本大震災・福島第一原子力発電所事故から1年がたちました。被災地の人々は、多くの生命・財産が奪われた苦しみや悲しみを乗り越えて、長期に亘る復興にあたろうとしておりますが、復興は、人々が期待するようには進まず、解決の道筋が見いだせない問題が山積しています。また、ヨーロッパ連合の一員であるギリシャの債務超過による国家財政破綻は国際経済を震撼させ、貧困を産む政治・経済の見直しが叫ばれています。このような状況の中で社会に船出される皆さんには、様々な困難な課題の解決に力を尽くしていただくことを期待します。

そこで、今日は、様々な困難を乗り越えるため方策を見出す時に有用なことについてお話したいと思います。それは、歴史に学ぶということです。歴史は最良の教科書と言われ、歴史を振り返ることは、その推移から現状を客観的に認識・評価し、将来を予見することになるのです。

20世紀最大の歴史家の一人として挙げられるフェルナン・ブローデルは、歴史的時間における重層性という重要な概念を提示しました。歴史を、「長期持続」「重合局面」「事件」という3つの大きな時間層として把握することを提唱したのです。「長期持続」とは、地理的な時間で、「人間を取り巻く環境と人間との関係の歴史」、「ゆっくりと流れ、ゆっくりと変化し、しばしば回帰が繰り返

返され、絶えず循環しているような歴史」です。「重合局面」とは、「社会的な時間」で数十年の「緩慢なリズムを持つ歴史・人間集団の歴史・再編成の歴史」です。社会と経済の動きが中心テーマとなります。「事件」とは、「個人の時間」で、最も短い時間です。これがいわゆる「伝統的な歴史、事件史」で、歴史の中に暮らす人々が発生したと認識する物事で、歴史年表に記述されるものです。「表面の動揺であり、波立ちである。短く、急であり、神経質な揺れを持つ歴史である」とブローデルは述べています。

ブローデルは、第一の時間層について、そこに生きる人間には殆ど動いていないかに見える、非常に緩慢な地理的時間の重要性を指摘し、すべての歴史は、この「長期持続」の歴史の周りを回っているとしています。今回の東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故は、まさに、この、「長期持続」「地理的時間」の存在とその作用の大きさを、我々に実感させました。このような史上稀な大災害に遭遇すると、絶大な自然の力に対する人間の非力さ、被災地の荒涼とした風景を前にして文明や人間そのものの持つはかなさを感じ、「あきらめ」と「無力感」に襲われるものです。しかし、歴史を紐解くと、およそ1100年前に記録されている貞観地震は、地質学的調査から見て、今回の東日本大震災・大津波と同じ規模であったと推定されています。今災害に直面している我々にとっては「未曾有」であります。歴史をみると、日本の地理学的・地質学的構造のゆっくりとした周期的活動の相の一つであったことが明らかになっています。甚大な被害と多くの尊い命を犠牲にしましたが、このことは、未来に向かってどのような安全な社会を造っていくのかというビジョンの構築に、1つの大きな指針を与えるものです。

また、第二の時間層である人間集団の大局的再編成の歴史、「重合局面」をみると、文明は南東から発して次第に西・北へと移行し、再び東に回帰するという流れが見られ、400～600年の周期で東西文明の交互興隆の傾向があります。巨大な一国の独占支配の永久的繁栄はなく、2大勢力の対立的な栄枯盛衰と共倒れ、巨大化や画一化の弊害の露呈、人心の荒廃墮落による内部崩壊の歴史の繰り返しといえます。このような歴史の中で、現在世界が直面している政治・経済的困難を見ると、教訓を与える歴史があります。それは、ローマ帝国滅亡の歴史です。ローマ帝国は、紀元前8世紀に小都市国家として建国され、領土拡大により、パックス・ロマーナと呼ばれる史上空前の繁栄を謳歌しました。その後、ローマ帝国は、帝国拡大の弊害と挫折した改革のために国力が衰退し、やがて滅亡しました。帝国滅亡の過程で、いくつかの改革が試みられました。賢帝ハドリアヌスは、帝国史上初めての「帝国縮小」を決意しました。しかし、保守的な元老院の猛反対に遭い挫折しました。多くの皇帝たちが贅沢禁止令により市民生活の縮小を目指しましたが、市民たちの反対でこれも挫折

しました。一度得たものを手放すのはいつの世も難しいものだということを表しています。結局、改革は実現できず、滅亡の道をたどることになります。ローマ帝国の滅亡は、何不自由ない物質的に豊かな暮らし、突出した科学技術、軍事力をもつ大国が歩む宿命を、現代の我々に教えてくれるのです。

このような「長期持続」と「重合局面」という長い時間層の上に、様々な歴史的「事件」が起こります。これから歴史を造ってゆく我々は、3つの重層的時間のなかで、現在の事態を的確に捉え、新たな歴史を刻んでいくことが大切です。歴史に学ぶというのは、現前の出来事の意味は、3つの時間が重層する過去の出来事の中に位置づけて、始めて、その真の意味が解るということです。

幸いな事に、人間の脳の記憶の仕組みは、目の前に起こっている出来事を過去の出来事と参照しながら位置づけることがうまくできるような仕組みになっています。記憶の障害の中で、逆行健忘という障害があります。これは、いったん獲得した過去の記憶を現在の時点で想起できないもので、Ribot（リボー）の法則といわれている特徴があります。古い記憶ほど強固でおかされにくく、新しい記憶ほど不安的で失われやすいのです。Ribotの法則は、記憶のメカニズムの解明の大きな手掛かりとなってきました。そして、次のような仕組みが想定されています。我々は、様々な出来事に遭遇しますが、海馬がそれらの一時的な貯蔵所となっています。睡眠中にその活動が再生され、大脳皮質とくに前頭前皮質と海馬との協調活動により、意味的知識が抽出され、脳の神経結合が再編されて記憶が固定化するというものです。古い記憶は、脳の神経結合の構造として保持されますので非常に堅牢となっていると考えられています。次々に出会う様々な出来事は、構造化された古い記憶に取り入れられ、意味記憶の再統合、すなわち、神経結合の再組織化が行なわれます。人間は、このような脳による内的記憶を持つだけではなく、道具を使用した外的記憶も用いることができます。メモをとる、映像をとる、録音するなどという行動は、過去の情報を保存するためになされます。また、記念碑やモニュメントを立てて、大切に大きな出来事、皆が忘れてはいけない出来事を記憶しています。内的記憶は一人の人間の肉体的・生物学的条件に制約されますが、外的記憶を用いることによってその制約を補うだけでなく、時間的に遠い過去や空間的に遠い地域の出来事も記憶できるようになっているのです。このような人間の記憶の仕組みは、一人の人間では把握することのできない「長期持続」「地理的時間」や「社会的時間」を把握することを可能にします。それによって、目の前で起こっている出来事を、歴史時間の重層構造の中で捉え、将来を見越した判断ができるようになっているということもできます。人間の記憶の仕組みは、歴史に学ぶように造られているのです。

情報化時代といわれて久しい現代は、様々な情報があふれ、ともすれば、新

しい情報を追いかけるのに忙殺される傾向が強くなっています。しかし、新しいと思っている情報は、何世紀か前の人々が経験した出来事と重なり合う、これが歴史です。グローデルが著した「地中海」という歴史書では、16世紀の地中海世界は、「イスラム教とキリスト教という宗教の衝突であり、・・・広い意味で文明の衝突であり、解決するのが困難で、長く続く運命にある」とあります。この16世紀の問題はまさに、21世紀の問題と重なり合います。また、「物質文明・経済・資本主義 15～18世紀」という著書では、15世紀には世界経済はすでに共有されており、世界市場の広がりとしての世界経済、すなわちグローバリゼーションであったとしています。このことから、21世紀の今日のグローバリズムは、新しい出来事ではなく、資本主義の本質に根ざした特性であることが明らかになります。歴史を紐解くことによって、現在直面している困難を克服するための、鳥瞰図が得られることがあるのです。

このことは、不易流行という言葉の意味を改めて思い起こさせます。不易流行は、俳人の松尾芭蕉が唱導した理念で「千歳不易・一時流行」の略語です。不易とは、発想表現の上で新奇をねらわないことで、いつの代でもしみじみと共感されるのが不易の句とされます。これに対して、流行とは詩における流転の相で、その時々の新風の体とされ、その時々的好みに応じて「新しみ」を発揮したのが流行の句といわれます。不易相の刻々の断面が流行相というわけです。我々は、ともすれば歴史における流行相に気を取られがちですが、不易相を見出すことによって始めて流行相の意味が解るということを肝に銘じる必要があります。

明日から新たな挑戦を始めることになる皆さんには、本学で学んだことをそれぞれの立場でさらに深め、歴史に学び、新たなパラダイムを構築して、人類に課せられている諸問題を解決し、新しい歴史を創造していただくことを期待します。

皆さんの活動が世界の人々の幸福に大きく貢献することを祈って、私の告辞と致します。

本日は、修士の学位取得、まことにおめでとうございます。

平成24年3月26日
京都工芸繊維大学長
江島義道